

小説『坂の上の雲』

「まことに小さな国が、
開化期をむかえようとしている。」(中略)
「伊予の首邑しゅゆうは松山。
城は、松山城という。」

『坂の上の雲』第一巻より



主人公たちの人生をたどりながら、 「近代国家」の仲間入りを目指す明治の日本

司馬遼太郎さんが四十代のほとんどをかけて完成させた小説『坂の上の雲』。物語は、正岡子規、秋山好古・真之兄弟の三人の人生をたどりながら「近代国家」の仲間入りをしようとした明治の日本を描いています。

何もかも新しく作りあげねばならなかったこの時代は、学問さえすれば何者にもなりえた時代でした。貧しい下級武士の家に生まれた好古と真之は、軍人の道を選ぶことになり、好古は草創期の日本騎兵を育て、真之は日本海軍における近代戦術の確立者としてそれぞれの道を歩んでいきます。子規は新聞記者となり、近代俳句、短歌、文章の革新に力を注ぎました。

東洋の小さな国に過ぎなかった日本が、西欧諸国に追いつこうと懸命に国づくりを行った姿から、多くのものが見えてきます。



それぞれの道で 白い雲を目指した主人公たち



まさおかしき
正岡子規 (1867~1902)

新聞記者・文学者

松山藩士・正岡常尚の次男。藤原新町生まれ。大学予備門から帝国大学に進みます。その後、日本新聞社に入り、俳句の革新を叫んで日本派俳句を確立。伝統の文芸に新しい息吹を与えました。子規は病の床についてからも文学への情熱はますます旺盛で、「歌よみに与ふる書」で短歌革新ののろしをあげ、時代にふさわしい新しい表現を模索しつづけます。漱石とともに平明な日本語の散文を作り上げ、後の文学の発展に大きな足跡を残しています。

このほか松山にベースボール(野球)をはじめて紹介。およそ35歳で病没するまでに「竹乃里歌」「俳諧大要」「仰臥漫録」「病牀六尺」など多くの著作を残しました。



あきやまさねゆき
秋山真之 (1868~1918)

軍人(海軍中将)

松山藩士・秋山久敬の五男。中歩行町生まれ。松山中学を中退して上京。子規とともに大学予備門で学びますが、中退し、海軍軍人の道を歩みます。海軍兵学校を首席で卒業し、日清戦争を経て、米国へ留学。日露戦争では、連合艦隊司令長官・東郷平八郎の作戦参謀となり、日本海海戦でバルチック艦隊を撃破しました。そのときの電文「本日天気晴朗なれども波高し」は名文として今も残ります。

海軍大学校教官、海軍省軍務局長を歴任し、海軍中将まで出世しましたが、49歳の若さで病没しています。天才的な戦術により、東郷平八郎は「智謀湧くが如し」と賞賛しました。



あきやまよしふる
秋山好古 (1859~1930)

軍人(陸軍大将)・教育者

松山藩士・秋山久敬の三男。中歩行町生まれ。好古は、藩校明教館、大阪師範学校、陸軍士官学校から陸軍大学校へと進み、旧藩主・久松定謨に伴い、フランスに留学。フランスには、子規の叔父・加藤拓川が外交官として赴任していたため、旧交をあたためています。好古は、日本の騎兵を戦略機動集団に育て「騎兵の父」と呼ばれます。

日露戦争では、世界最強と言われたコサック騎兵を相手に戦い、日本の勝利に大きく貢献。退役後は、松山の北予中学校の校長となり、余生を後進の育成に尽くしています。71歳で死去。墓は、松山道後の鷲谷墓地と東京青山墓地にあります。